

活動実施計画書

団体名：大曽根まちそだて会議

1 都市マスとの関連性（A～H、1～3 をそれぞれ選択して記入してください。）

D-2-2 多様な公共空間における緑・水・にぎわいの創出
E-4-2 既成市街地の再生
B-2-1 まちのにぎわいを創出するみちまちづくりの推進

2 活動地域の特性、現況、課題

大曽根の商店街が立地する大曽根地域は、JR・名鉄・地下鉄・ゆとりーとライン・市営バスが乗り入れる交通結節点であり、1 日あたり約 17 万人が利用する利便性の高いエリアである。また、医療機関、商業施設、教育機関、文化・自然資源が集積しており、生活利便性と多様な魅力を兼ね備えた地域である。さらに、人口は微増傾向にあり、市内と比較して 20 代・30 代の割合が高いなど、若い世代の居住も進んでいる。一方で、①商店街の知名度や求心力が低い ②高齢化に伴う店舗閉鎖により、空き店舗の増加が懸念されている ③商店街に面するマンション開発の進行により、商店街の連続性が希薄化しつつある ④イベント運営の担い手不足など、持続的な活動に対する不安がある といった課題が見られる。

3 団体の活動実績

※ 過去に地域まちづくりの助成を受けたことがある場合、その実績も含めて記入すること

本団体はこれまで、「商店街を核とした持続可能な地域づくり」を活動方針として、対話・広報・実践の各側面から活動を継続してきた。過去に地域まちづくり活動助成（令和 4 年度 PR 助成）を受け、「大曽根ニュースレター」を発行し、地域イベントや取組の情報発信を行うことで認知度向上や地域との関係性の構築を図った。さらに、助成終了後も協賛等を集めながら自主財源により「大曽根ニュースレター」を継続発行している。

また、空き店舗調査や空き店舗ツアーを実施し、地域資源の可視化と関係者間の共有を進めてきた。加えて、「大曽根地域の将来ビジョン中間案（2026 年 4 月）」を策定するとともに、「まちそだてサロン」「みんなのまちそだて会議」を継続的に開催し、対話を通じた関係性の構築と課題共有を行っている。これらの活動を通じて、地域内外の多様な主体とのつながりを形成してきた。

4 助成を受けようとする活動の目的

本団体ではこれまで、「商店街を核とした持続可能な地域づくり」を活動方針として取り組んできた。その中で、まずは団体役員の活動目標や方向性を見出すことを目的とし、いきなり地域全体のビジョンを策定するのではなく、団体役員を中心に何度も対話を重ねることで、将来ビジョンの中間案を取りまとめた。

しかし、現時点の将来ビジョンは、近隣事業者や地域住民、外部関係者といった多様な主体の視点を十分に反映できていないという課題がある。そのため、本ビジョンはあくまで「中間案（たたき台）」として位置付けており、今後は地域全体での対話を通じて内容を深めていく必要がある。

大曽根地区は、都市計画マスタープランでは交通結節点として多様な都市機能が集積する「地域拠点」として位置付けられている。一方で、商店街の求心力が低下しており、既存ストックや公共空間も十分に活用できていない状況にある。

※ この様式は公開されます。

本活動は、この将来ビジョン中間案を出発点とし、地域内外の多様な主体との対話および先進事例の調査を通じて、関係者同士の視座を共有しながら協働の歩みを生み出すとともに、まちづくりの方向性を大曽根地域全体の視点から再整理・具体化することを目的とする。

あわせて、空き店舗や公共空間等の既存ストックの活用を通じた市街地の再生（E-4-2）、公共空間や道路空間を活かしたにぎわい空間の創出（D-2-2）、歩行者主体の回遊性のあるまちづくり（B-2-1）に資する取組として展開し、地域拠点としての機能向上と持続的なまちづくりの基盤形成につなげていくことを目指す。

5 活動による今年度の成果目標

本年度は、将来ビジョン中間案を起点とした対話および外部知見の導入を通じて、関係者間の視座を共有し、まちづくりの方向性を整理するとともに、今後の協働につながる基盤を形成することを成果とする。具体的には、以下を成果目標とする。

- ・将来ビジョン中間案の主要戦略に対する理解の深化と、戦略ごとの具体的な解釈および実現可能性の整理（参加者アンケートにより理解度・関心の変化を把握）
- ・地域内外の多様な主体との意見交換を通じた、認識・課題意識の共有および連携の糸口の創出（ワークショップ4回開催（各回20名以上）、延べ参加人数100名以上、関係主体5者以上との意見交換の実施）
- ・瀬戸線沿線連携をはじめとする、地域を越えた新たな主体との関係形成（瀬戸への視察の実施（参加者15名程度）および瀬戸・名鉄関係者を交えたワークショップの開催。いずれも関係者と要調整）
- ・過去のまちづくり実践の再評価による、商店街の価値や役割に対する認識の更新（アンケート・意見記録により認識の変化を把握）
- ・対話および調査結果の整理・蓄積による、次年度以降の協働プロジェクト検討に資する基盤の構築（成果報告書の作成および関係者への共有）

6 助成を受けようとする今年度の活動内容

本年度の各事業は、「大曽根は、誰のまちになるのか」を年間テーマとする一連のストーリーとして設計する。参加者が来場するだけでなく、ともに企画し実践に関わる「一緒に作る」場づくりを重視するとともに、瀬戸線沿線連携という新たな軸を加え、関係人口をはじめとする新たな担い手の発掘・育成につなげながら、以下のとおり実施する。

1. 「大曽根の過去とこれからをつなぐパネルディスカッション」の開催 ～大曽根のまちづくりは「失敗」だったのか？～（令和9年2月）

過去のまちづくり実践（建築協定や商店街リニューアル事業等）について、有識者等との対話を通じて功罪の両側面から再評価を行い、現在の公共空間や街並みがその蓄積の上に成り立っていることを共有することで、商店街や地域空間の価値に対する認識を更新し、新たなまちのイメージ形成と外部人材との関係構築につなげる。登壇者は、外部有識者（都市計画・商店街再生の研究者等）、地域証言者（元商店街役員等）、現役世代の担い手（大曽根で活動する若手事業者・住民等）と聞き手（本会）で構成し、前半をパネルトーク、後半を会場との対話とする2部構成で実施する（目標来場者50名）。商店街近隣住民・店舗、大曽根の商店街のファン等を主な対象とし、まちづくり活動の情報共有も図る。

2. 将来ビジョン中間案の主要戦略をテーマとしたワークショップ「みんなのまちそだて会議2026」の開催（年4回）

将来ビジョンで掲げる主要戦略ごとに、有識者による知見提供と参加者同士の対話を組み合わせたワークショップを実施する。各回は「その回の問い→参加者が生み出すアクション→次回へのつながり」を明示して設計し、単発イベントではなく一本のストーリーとして積み上げることで、戦略の具体化と、実践に関わる担い手・関係性の創出を図る。第1回：空き店舗活用・居場所づくり（8月下旬）／第2回：ウォーカブル・公共空間（9～10月）／第3回：文化の継承（11月）／第4回：地域連携・瀬戸×大曽根×名鉄（12

※ この様式は公開されます。

～1月、関係者と要調整）。各回20～25名程度の参加を想定し、グラフィックレコードおよびレターを作成して参加者へ共有する。

3. 先進地域の視察（瀬戸×大曽根 連携プロジェクトとして実施）

当初計画の単独視察から方針を転換し、「瀬戸線沿線連携」の一体型プロジェクトとして第4回ワークショップと一体的に実施する。ステップ1として瀬戸への視察（10～12月を目途に、受入先・名鉄等と調整中）を行い、瀬戸の商店街が「ものづくり文化」を活かした地域連携をどう実現しているかを、運営体制や関係者の役割分担等の実装プロセスまで含めて把握する。ステップ2として、瀬戸関係者・名鉄・大曽根関係者を交えた第4回ワークショップを大曽根側で開催し、視察→対話→提言の流れをつくることで、構想の現実性・実効性の向上につなげる。

4. 将来ビジョン中間案を起点とした関係主体との意見交換の実施

「将来ビジョン中間案」を基に、関係主体との意見交換を年間を通じて実施する。対象は、両商店街、名鉄（要調整）、名古屋まちづくり公社（大曽根駅地下街「オズガーデン」の利活用。令和8年6月に2回実施済み）、近隣医療施設（要調整）、地域事業者、近隣自治会等とし、将来ビジョンの共有状況に応じて柔軟に拡張する。各回の内容はレターとして整理・共有し、認識の蓄積と次のアクションにつなげることで、小規模な協働プロジェクトの創出と継続的な協働関係の基盤形成を図る。

5. 助成対象事業における「大曽根地域の将来ビジョン中間案」の使用・配布

ワークショップや意見交換等の助成対象事業において「大曽根地域の将来ビジョン中間案」を共通資料として使用・配布し、参加者間で現状認識や将来像を共有する。

7 今年度の活動実施の際に協力や調整等が必要となる関係者等

- ・商店街（大曽根商店街振興組合・大曽根本通商店街）：過去のまちづくり実践に関する資料提供等を通じてパネルディスカッションの内容充実に協力を得るほか、チラシ掲示や情報発信への協力を得る。
- ・商店街近隣住民：ワークショップやパネルディスカッションに関するチラシの掲示・配布や参加を依頼する。
- ・地域事業者（周辺商業施設・医療機関等）・駅事業者（JR・名鉄・ゆとりーとライン等）：将来ビジョン中間案を起点とした対話を重ねて相互理解を深め、協働に向けた関係構築と連携可能性を検討する。
- ・瀬戸側関係者（瀬戸の商店街・まちづくり関係者等）・名古屋鉄道（要調整）：瀬戸への視察および第4回ワークショップの実施にあたり、今後打診のうえ、受入れ・登壇等の協力および日程・内容の調整を得る。
- ・名古屋まちづくり公社：大曽根駅地下街「オズガーデン」の利活用に関する意見交換および会場活用等の調整に協力を得る。
- ・有識者・専門家（まちづくり、都市計画、エリアマネジメント等）：ワークショップでの知見提供等の助言を通じて、構想の専門性および客観性の向上に寄与する。
- ・行政（名古屋市関係部署等）：情報共有や制度面での助言等を通じて、事業の円滑な実施に向けた調整に協力を得る。

8 今年度の活動内容のスケジュール

月	活動内容	詳細
4月	準備	「大曽根地域の将来ビジョン中間案」を発行し、年間活動の構想整理を行う。
5月	準備・調整	実施体制の検討および事業計画の整理を行う。
6月	体制整理・キックオフ	交付決定を受け、体制整理・年間計画の策定を行う。キックオフイベントを開催（6月27日実施済み）。
7月	企画設計①・意見交換準備	第1回ワークショップの企画設計・調整を行い、関係主体への意見交換の準備を進める。

※ この様式は公開されます。

8 月	WS①（空き店舗活用）	「空き店舗活用・居場所づくり」をテーマにワークショップを開催する（8 月下旬）。関係主体との意見交換を開始する。
9 月	企画設計②・意見交換	第 2 回ワークショップの企画設計を行う。意見交換を継続し、課題の整理を行う。
10 月	WS②（ウォーカブル）・視察調整	「ウォーカブル・公共空間」をテーマにワークショップを開催する（9～10 月）。瀬戸への視察の調整を進める。
11 月	WS③（文化の継承）・中間報告	中間報告書を提出（期限 11 月 6 日）。「文化の継承」をテーマにワークショップを開催する。
12 月	瀬戸視察・企画設計④	瀬戸への視察を実施する（時期・内容は受入先等と調整中、10～12 月を目途）。第 4 回ワークショップの企画設計および瀬戸・名鉄関係者との調整を行う。
1 月	WS④（地域連携）	「地域連携（瀬戸×大曽根×名鉄）」をテーマにワークショップを開催する（12～1 月、関係者と要調整）。
2 月	パネルディスカッション実施	「大曽根の過去とこれからをつなぐパネルディスカッション」を実施する。
3 月	成果整理・実績報告	年間の取組を成果報告書に取りまとめ関係者へ共有する。実績報告書を提出（期限 3 月 5 日）。

9（構想策定・実践目的達成）までの想定プロセスと今後の展望

本事業は、将来ビジョン中間案を起点として、地域全体の視点からまちづくりの方向性を再整理・具体化していくプロセスの初年度に位置付けられる。本年度は、ワークショップや瀬戸への視察、パネルディスカッションを通じて地域内外の多様な主体との対話を重ね、関係者間の視座の共有を図るとともに、将来ビジョンに対する多角的な解釈や可能性を整理する段階とする。あわせて、得られた知見を商店街ヘフィードバックし、商店街自身によるビジョン検討を後押しするとともに、協働につながる関係性と担い手の創出を目指す。次年度（2 年目）は、本年度に整理された方向性や関係性を基に、各戦略（ウォーカブル、地域連携、空き店舗活用、文化の継承）に対応した小規模な実践を通じて具体的な協働プロジェクトの検討・試行を行い、地域主体による実装に向けた条件整理を進める。最終年度（3 年目）は、対話と実践の蓄積を踏まえて将来ビジョンの再整理・更新を行うとともに、商店街を核とした継続的な実行体制や役割分担を整理し、持続的なまちづくりの基盤を確立する。

さらに、本事業を通じて形成された関係性や知見を活かし、本年度に着手した瀬戸線沿線連携をはじめ、助成終了後も地域主体による協働プロジェクトを継続的に展開していくことで、「商店街を核とした持続可能な地域づくり」の実効性を高めていくことを目指す。

※ 各欄のサイズ変更は可能ですが、4 ページを超えないように作成してください。

※ 用紙の大きさは日本産業規格 A4 とする。

※ この様式は公開されます。